

令和7年度第2回 市民活動・ボランティアサポートセンター運営会議 会議録

日 時 令和7年12月23日(火) 10:00~11:45

場 所 姫路市市民会館 5階 第11会議室

出席者 構成員7名 事務局4名

(構成員) 米谷 啓和 座長 三宅 靖子 氏 井関 崇博 氏
大西 麻衣子 氏 濱木 陽介 氏 増田 英敏 氏 横田 和江 氏

(事務局) 市民参画部 木村 部長 市民活動推進課 門口 課長
市民活動・ボランティアサポートセンター 吉田 所長 前坂 主任

次 第

1 開 会

2 議 事

報告

- (1) ひめじ夏のボランティア体験の実施結果について
- (2) ひめじ de ボランティア2025の実施状況について

議題

- ・ひめじおん講座の内容について

その他報告事項

なし

3 閉 会

会議の進行記録（要点記録）

座長： 本日は報告事項が2件ある。報告を通じてこれからのセンターの運営ビジョンについても皆さんからご意見をいただきたい。

議事（報告）「(1) ひめじ夏のボランティア体験の実施結果について」

事務局： 資料に従って説明

座長： 夏ボラの受入団体でもある方から事務局の補足も含めてご意見を伺いたい。

構成員： 配付資料の体験者アンケート結果も踏まえ、当団体もボランティア体験に参加された学生には楽しんでいただけているように思う。その後も継続して来てくださる方もいるのでこういった機会はとても素敵だと思う。

反面、受入団体アンケート結果にも記載があるように、学生との事前連絡には苦労する部分があり、参加学生との温度差や、事業周知の面では学校教員との温度差も感じる。

現在は、参加学生募集の際に、体験プログラム冊子の文面だけを見て参加されている。ホームページなどをしっかりと作成・運営されている団体であればイメージが湧くと思うが、ホームページがあってもそこまで手を入れていない団体もある。そこの参加者側との温度差を埋めるための工夫を今後やっていくと、より前向きに参加してくれるのではと感じている。

座長： 受入団体側の情報公開をという話であるが、ひめじおん公式ウェブサイト「市民活動公式サイト」（以下「公式サイト」という。）との連携・連動はどの程度できているのか。

事務局： 昨年度の運営会議でも、公式サイトのさらなる活用をというご意見もいただいたので、先日、公式サイトのリニューアルに伴う説明会を開催したところであるが、公式サイトの利用登録団体が、利用登録したものがあまり活用できていない状況にある。

また、公式サイトと各団体ホームページとの連動もなかなかできておらず、各受入団体でも「夏のボランティア体験募集」の事業周知や日頃の団体活動がわかるようなPRをしていただきたいと思っている。

座長： 私が主催するNPO団体もサイトの利用登録はしているが、情報更新ができていな

い状態である。事務局に更新するよう伝えるにしても、その分手間が増えることになるので、公式サイトで情報提供するメリットを提示できるようにしたい。

事務局： 体験者アンケートの「夏ボラを何で知りましたか」という問い合わせに対し、センターの公式サイトを見てくださった学生が回答者のうちの17%と一定数いることが分かった。

各団体がそれぞれで発信することももちろん必要だが、情報が集約されたサイトで「ここを見れば姫路市のボランティアに関する情報が全部集まつてくる」という状態にする方が、そこから各団体ホームページやSNSに誘導していくやすいと考えている。そこを公式サイトのメリットだと各団体に感じていただけるようにしていきたい。

各団体が公式サイトで投稿してくださるようになればなるほど、相乗効果で団体のホームページやSNSも見ていただける方が増えるのではないかと思う。

座長： 手間以上のメリットを具体的に提示できるとよい。

参加団体の申込があったときに、公式サイトの利用登録ができたりするのか。

事務局： センターへの新規団体登録の受付の際、公式サイトの趣旨を説明したうえでサイト利用登録の希望を確認し、希望する団体にアカウント発行している。

座長： その段階でもメリットを提示し、サイト利用登録してもらう一つのきっかけになる。

構成員： 夏ボラの実施総括として、外国人留学生の複数参加があったとのこと。

私も姫路市社協でコロナ禍に外国人留学生とたくさんお会いする機会があった。

皆さんとても忙しく、仕事と学業を両立されている方が非常に多かった。そんな中で今回なぜボランティアに参加されたのかをセンターとしてどう捉えているか。

事務局： 今回まとめて申込があったのが姫路福祉保育専門学校である。別の会議に私が参加した際に、当該学校の先生も参加されていた。現在、姫路福祉保育専門学校では介護学科の大半が留学生だそうで、その活動の場としてボランティア先を探されていると聞いた。ちょうど夏ボラ募集前であったので、ぜひ活用してほしいとご案内したところ、先生が取りまとめて申し込んでくださったという経緯である。

構成員： どこの国から的人が多かったのか。一般的に中国人が多いとか。

事務局： 定かではないが、ベトナムやインドなどアジア系の方であった。中国人はいらっしゃらなかった。

日本語はすごく上手なので、実際の活動に関しては問題はなかったが、事前連絡のやり取りが難しかったようで受入団体が少し困ったようである。

構成員： 受入団体が33団体・36メニューということであるが、これは夏のボランティア体験プログラムに参加して、受け入れたいと自ら希望された団体か、それとも姫路市から受け入れてほしいと依頼して参加された団体か。

事務局： 例年5月に受入団体募集を行っており、全てのセンター登録団体に募集要項を送付し、受入メニューを出しませんかとご案内している。センターからの依頼による参加というよりも、PRの機会と捉えた団体が自ら申し込む状況である。

構成員： 学生側とあわせて、団体側にもいろんな考えがあり、参加のモチベーションもそれぞれ違う。そのため、学生と受入団体とで多少のトラブルが起きるのも仕方なく、だからといってこの取組が良くないというわけではない。

受入団体、姫路市、学校の3者が、なるべくコンフリクトが起きないように調整していくべきよい。例えば、体験プログラム冊子の情報提供の仕方を少し改善したり、学校サイドから学生に参加にあたって自覚してほしいことを伝えてもらったりなど。

事務局： 今回参加学生数が倍増したが、学生に参加理由を直接聞いたところ、学校の先生からの案内や教室の掲示板に貼ってあったという声が多かった。参加を積極的に案内してくださる先生がおられたと推測される。

会議やイベントなどの場でお会いした先生には個別に案内メールを送り、学生への周知をお願いしているが、それは続けていきたい。

その他、前回会議でも報告したが、探究学習とボランティアとの連動という形で高校に出前講座に行くなど、こちらから出向いて事業周知をしていきたい。

ただ大学生に関しては参加が少なく、大学生に参加してもらうにはどうしたらいいのかと悩んでいる。

構成員： 例えば体験プログラム冊子の最初に記載している事業趣旨や流れ、参加の心得などを充実させてはどうか。あとは、手本となるような体験談を載せることで学生が体験のイメージが湧きやすくなる。

そういう改善をすることで、参加者と受入団体側の調整を図ってみては。

座 長： 数少ない大学生の体験談をプログラム冊子に載せるといい。

構成員： 参加のきっかけも含めて載せると、こういう思いで学生が参加しているというマインドの部分が伝わりやすい。

座 長： 通信販売の広告のように、つい読んで申し込みたくなるようなプログラム冊子にしたらいいかもしない。

構成員： 私も「ひめボラ」で姫路・町家再生塾のボランティア体験に参加した。その際、一緒に体験した高校2年生が「将来仕事をどうしようかと考えていて、そのイメージが湧けばという思いで参加した」と言っていた。学生の場合、そういう違う目的で体験されているんだと思った。

構成員： 事前連絡については、参加者の立場から言うと、なぜ事前連絡が必要なのかが分からなかった。参加のリマインドの意味も含めての事前連絡だとは思うが、なぜ必要なのか分からなければ連絡しなかったかもしれないし、気づかなかつたのかもしれない。初めての相手に連絡するハードルがある人もいるかもしれない。

事務局： 確かに学生は連絡するのはハードルが高いのかなと思うところである。電話だけでなく、メールやLINEなど、連絡手段の選択肢が増えた方がハードルは低くなると思うが、現状、事前連絡手段は受入団体ごとに指定してもらっている。

座 長： センターからリマインドメールを送るような仕組みはないのか。

事務局： センターから団体や参加学生へのリマインドはしていない。
参加学生への決定通知で団体へ事前連絡するよう記載しているのと、受入団体への決定通知にも学生から事前連絡がなければ、団体側からの連絡をお願いしている。

ただし、受入予定人数が多い団体の場合、団体側から事前連絡をするのはかなりの負担になるため、“事前連絡不要”とすることも認めている。その場合、体験当日に活動趣旨や活動への想いをオリエンテーションとして最初に伝えるようお願いしている。事前連絡の必要性も踏まえて、引き続き考えていきたい。

座 長： 私は県立姫路飾西高校の探究学習に関わっており、学生は夏ぐらいまでに探究テーマを決めている。こうした探究学習やSTEAM探究の学科にPRするといい。高校1・2年生はまだ社会体験が少なく、夏ボラはいいチャンスになると思う。

大学推薦入試でボランティア実績も評価されるなら、進路指導担当にもPRするといい。

座長： 実施時期についても、夏場はすごく暑いので、春や冬など時期を広げられると継続性も含めて広がるのかなとは思う。そのあたりは受入団体に取り組んでもらうといいのかもしれないが、情報の告知だけでもいいので、夏に体験した人が続けて参加できるようなきっかけがあればいい。

座長： それでは報告の2番に移る。

議事（報告）「(2) ひめじ de ボランティア 2025 の実施状況について」

事務局： 資料に従って説明

座長： 何かご意見、アドバイスなどあれば。

構成員： ひめボラ市に団体として今年初めて参加した。個人的にはこの時期（11月3日）の開催はすごく賛成である。全国陶器市と日程が重なっており、いろんな場所でイベントがある時期なので、通りすがりの人もやはり多い。

構成員： スタンプラリーに関しては、設置場所を時間ごとに動かすのであれば、その設置スケジュールを参加団体に事前共有してもらえるとよい。
もしくは各ブースにつづつスタンプがあれば、来場者との交流の時間を確保することにも繋がると思う。

構成員： 昨年度も団体としてダンスやブースで参加したが、今年はステージ前にたくさん観客もあり、オープニングセレモニーから多くの団体が参加して盛り上がっていると感じた。地下の出展ブースのセッティングで運営スタッフが少し右往左往していたように思うので、会場準備の段取りは改善が必要。

構成員： 人口減少の中で、夏ボラもひめボラ市も参加者数が増えているのは素晴らしい。ただ市としてひめボラ市の位置づけを考えるとやはりきっかけづくり。ここから夏ボラやひめボラなど他の事業に広がって欲しいのであれば、総合案内ブースや各団体ブースで「もう一步踏み出しませんか」「今度一緒にやりませんか」といった働きかけが必要だが、それはしていたのか。

事務局： おっしゃるとおり、ひめボラもひめボラ市もあくまで、ボランティアとの出会いのきっかけの場づくりである。

センターとして参加者を継続的な扱い手に繋げていく明確な仕掛けはできていない。ひめボラ市来場者やひめボラ参加者をいかに自分たちの活動に引き込むかは、各団体にぜひ頑張って欲しいと事前説明会や開催後の交流会でお伝えしているところである。センターはきっかけを提供し、そこから各団体が継続的な参加に繋げてほしいと考えている。

ただ、センターでも何かできることがあれば取り組みたいので、ご意見いただきたい。

構成員： 11月3日は祝日なので観光客も多く、駅前で外国人も含めていろんな方がいたと思うが、来場者の内訳などは分かるのか。

事務局： 来場者アンケートでの回答割合でいうと、姫路市内の方の来場が多い印象である。観光客の方も多い時期なので、ステージ発表の内容によっては、外国人が立ち止まって見られていることも結構ある。

構成員： 駅前開催は一見の方にも姫路市をアピールするという意味ですごくいいし、参加団体や来場者が増えているのもすごく評価できる。

構成員： 私の所属団体（姫路観光ボランティアガイドの会）も、ひめボラ市には今年初めて参加した。ひめボラは3年連続受入している。

ひめボラ市では団体のパンフレットを配るなどで呼び込みをしたが、午後はブースへの来場者が少なかった。

ただスタンプラリーのスタンプを押しに来られた方には必ず団体の説明をするよう事務局から説明があり、仕掛けとして組み込んでいただいたのはすごく良かった。なかなか自分たちから通りがかりの人への呼びかけは難しいので。

また、日頃団体メンバーはそれぞれ別々のスケジュールでガイドをしているので、一緒に行動することが少ない。ひめボラ市では、そんな日頃とは違うメンバーとも話す機会にもなった。

構成員： それと、ひめボラやひめボラ市での観光ガイドのボランティア体験で、何を体験してもらうのがいいのかいつも考えている。

実際には、あらかじめ設定されたコースから好きなコースを選んでもらい、一緒に案内しながら、参加者が知りたいことをお伝えしている。

案内だけに終わってしまう部分があり、どうすればガイド体験をしたと感じても

らえるのか、私達ガイドの方からは分からぬ。参加側から見てガイド体験として何をしてほしいのかを教えてほしい。

一方でひめボラをきっかけに団体メンバーになってくださった方も若干名おり、今年度も検討中の方が2人ほどいる。

構成員：ボランティアをする側の体験でなくても、「ボランティアガイドと一緒に回るとこんなにいろいろ知れるんだ。なら自分もやってみようかな。」「こんなにいい活動なんだ。」というのをガイドしてもらう経験から感じるのでいいのではないかと思う。私も今のお話を聞いて一度ガイドしてもらいたいと思った。

構成員：大学でも高校生に興味を持つてもらい受験してもらうために、オープンキャンパスを開催している。そこには在学生たちも多く参加し、自分たちが取り組んでいる研究内容を説明する。参加した高校生たちはその内容だけでなく、説明している大学生を見て、その大学生が生き生きしているとこの大学に入りたい！となる。ひめボラやひめボラ市も同じで、団体の皆さん生き生きしていたり、日頃の活動やガイドする側のやりがい・楽しさが伝わったりすると、自分も参加してみたいとなると思う。

構成員：どういうふうにボランティアの趣旨を伝えようかというのは、自団体でも悩んでいるところである。

ひめボラや夏ボラをやっている様子を、団体同士で実際に見に行くというのも一つ。

その中で、こうすればもっと活動の魅力が伝わるのではないかなど相互に意見交換するのも大事かなと思う。

そういう呼びかけをセンターがしたり、センターでイベント的に仕掛けたりすると今後のひめボラ等をより良いものにしていくきっかけになると思う。

座長：そういう仕組みはあるのか。

事務局：ひめボラや夏ボラの体験プログラムをセンターの公式サイトに掲載しており、どの団体がどんな体験メニューを行うかはそれを見てもらうと分かる。団体同士で体験の様子を見に行くというのは面白いと思った。他団体がどんな内容でどのように受入しているかを前年度中や日頃から見に行って、いいところを取り入れ合ってもらえるといい。

構成員：夏ボラのことだが、学生を対象にボランティア体験作文を募集し、参加目的や得

られた成果などを広報紙に掲載し発信していくと、さらに広がっていくかなと思う。採用されたら学校名や名前が出て、形として残るのも学生にとっていい体験だと思う。

構成員：ひめボラ市で活動を知り、ひめボラで実際にやってみるという流れが一番理想的かなと思う。どちらも同時期なので難しいかもしれないが、ひめボラとひめボラ市、さらには夏ボラとの連携や繋がりができると広がりがあるといい。

座長：センターの各事業で関連性があればよいということである。
その他お気づきの点があれば。

構成員：今年初参加の「姫路ティラノレース実行委員会」は目立っていてよかったです。

座長：事務局から見て、上手にブース運営やPRをされていた団体はあったか。次に繋がるような仕掛けまでちゃんと組み込んであるようだ。

事務局：自団体のチラシを準備していたり、ブースで簡単なアンケートを取られていたりという団体はあった。今年初参加の要約筆記サークルひめじはちょっとした筆談体験で立ち止まって体験される方が結構多く、要約筆記がこんなに受け入れられると思わなかつたと団体も驚くほどであった。

座長：少し覗きに行ったが、体験度合いの強いような内容だと立ち止まって体験してくれる方も多い印象であった。

座長：冒頭で申し上げたとおり、本日は報告が主だったが、今後センターに取り組んでもらいたいアイデアや提案などがあればぜひお聞きしたい。
この時期や次回（令和8年3月）に話をしても、令和8年度の予算はほぼ固まっているので、令和9年度のセンター事業に初めて反映できる。そういうことを考えると普段からアイデア出しをしておけば、センターで吸い上げて事業に繋がっていく。

座長：ひめボラ市の運営サポーターが20数名もおられたのはすごいと思った。
その方々に日頃からセンターの応援団となってもらい、何らかの活躍や繋がりの仕組みがあるとよい。この方々はそういう場を求めていたり、そういう場に参加することでやりがいや喜びを感じていたりする方だと思うので、ぜひ活躍の場が増えていけばいいと思う。

座長：センター内の各事業プログラムの連携、もっと言えば、姫路全体のまちづくりや市民活動、公民館活動や自治会活動ともどう連携していくのかがこれからの課題かなと感じている。

構成員：予算のこともあるかもしれないが、寄せという意味なら、一見ボランティアとは関係のないジャグリングやなどの見せ物やキッチンカーなどをひめボラ市に呼ぶのはどうか。

座長：普段、にぎわい交流広場を活用してステージ発表しているグループや団体などにボランタリー的に出演してもらうよう声をかけてもいいかもしれない。彼らにとっても自己PRや発表の場にもなるので、そこが上手くかみ合えば。

構成員：私は、普段の観光ボランティアガイドに引き込むのに、駅前で「写真を撮りましょうか」と声をかけると、それをきっかけにガイドの案内もしやすい。

構成員：前回会議でも申し上げたかもしれないが、芦屋市でも同様の会議に参加しており、そこでも議論になっているのが、「ボランティア」や「市民活動」の概念を広げるということ。我々が今まで「市民活動」という言葉でイメージしたものの中側にもたくさんある「社会を良くしていこうとする活動」が出てきている。
例えば、学生が学校教育の一環で行う探究活動も、社会を良くしようと取り組んでいる活動で、そういう活動が広がってきていて。
それらを必ずしもボランティアと言わなくてもいいが、センターとしても今までのボランティアに引き込むのではなく、概念を拡張して「その活動がそうです！」と扱うことで結果的に活動が広がっていくという方向性があつてもよい。
人口減少や担い手不足の中で、そういう考え方が必要になってきた。

構成員：企業の取組も同様に生まれてきている。これまでのボランティアにとらわれずに、多様な主体が地域を良くしていく活動を拾い上げて、見える化していくことで、実は同じことを目指しているんだという意識を持ってもらいたい。

座長：こうしたベースとなる議論もこの運営会議でできればと思う。
では本日の議事は以上として、終わりしたい。